



『永守流 経営とお金の原則』

永守 重信(著)
日本経済新聞出版
(2022/1)
1,760円

成長戦略という花を咲かせるための、会社をつぶさない財務戦略という根の張り方を学ぶことができます。

【感想】

日本電産の創業者で、同社を連結売上高1兆 8000 億円の大企業に成長させた永守重信氏が、50年の体当たりで会得した財務と資金繰りの基本原則を語った一冊です。

「最後にカギを握るのはキャッシュ(現金)」が財務の原則であり、経営の数字を理解する必要性について下記のように、強調されています。

『キャッシュが尽きるから企業はつぶれる。極端に言えば、どんなに多額の赤字を出していたとしても、キャッシュに余裕があるなら絶対つぶれない。だからこそ、バランスシートの資産サイドには現預金がいくらあるのか、すぐに現金化できない売掛金や在庫が膨らみすぎていないか、一方の負債サイドで1年以内に返済する必要のある借入金の規模はどれくらいか、などといった基本の数字を常に把握しておく必要があるのだ』

稲盛和夫氏の『稲盛和夫の実学—経営と会計』は実学の名著ですが、今回の一冊も財務の本質を理解して、経営に活かすという点で大変優れた内容となっています。

【以下引用】

・何とはなしに漠然と「こうなりそうだ」では絶対にダメである。計数感覚を発揮して将来のビジョンをはっきりと描けなければいけない。

・私は基本的に成長論者である。企業は存在する限り、常に成長を続けなければならないし、成長なしには企業の活性化は図れないと考えている。とはいえ、単に規模を求める膨張論者ではない。私が目指すのは強い会社である。

・経営にはリスクがつきものである、成長に向けてリスクはとる。ただし、最悪の事態になった場合は、どのくらいの損失になるのか、財務やバランスシートにはどのくらいの影響が出るのか、それらをきちんと事前に計算し、把握しておく。そのうえでリスクテイクをするのである。

・「高賃金・低労務費」売上高に対する労務費全体の比率はどこよりも低い、個々の社員の給料は他のどこの企業よりも高い。そんな「少数精鋭集団」を目指すことだ。

・リスク管理の基本はやはり分散である。1社の取引が全売り上げの 20%を超えないようにするという方針を掲げた。

・創業5～10年くらいまでの間は、何よりバランスシートの数字をソラで言えることが大切だ。

これからの物価上昇やインフレに耐えうるだけの財務体質をいかに築いていけるかが、大きな経営のテーマになってきており、こちらはぜひ読んで活用して欲しい内容です。